

5 大豆「サチユタカ」の狭条密植栽培における適応性

ねらいと成果

従来よりも条間を狭くして播種し、その後も中耕、培土を省略することにより、省力・低コストかつ大区画水田ほ場における大型機械体系に対応した大豆栽培技術が注目され、普及に向けての技術開発が進んでいる。一方、「タマホマレ」に代わる加工適性に優れた新しい品種として「サチユタカ」への転換が図られつつある。そこで、この品種の狭条密植栽培における適応性を検討したところ、最下着莢位置が高くなり、分枝が少なく、成熟が斉一で速やかになることによって機械収穫適性が向上し、さらに、晩播により粒揃いを高められることが明らかになった。

内容

条間30cmの部分耕播種機を用いて、播種時期（6月19日、7月5日）と栽植密度11.1株/m²（株間30cm、1本/株）、15.2株/m²（同22）、22.2株/m²（同15）の違いが、生育、収量、品質に及ぼす影響を検討した。

①栽植密度を高めると主茎が長くなり、分枝が減り、細莖化し、最下着莢位置が高くなった。慣行の栽植密度では茎が太く、子実成熟期を迎えても茎水分が高いままなので収穫期がかなり遅れることが懸念されているが、狭条密植栽培することによって細莖化が図られ、子実成熟期と機械収穫適期のずれを緩和することができた（表）。

②子実収量は、播種時期の違いによる差は小さく、

晩播では栽植密度が高いほど高収量になった（図1）。

「サチユタカ」は大粒化しやすい品種のために粒径がばらつく傾向にあるが、晩播することによって、粒径のばらつきは緩和され、粒揃いが向上した（図2）。

普及上の注意事項

「サチユタカ」は、早播すると茎径のばらつきが大きくなるうえに、種子の成熟期から収穫までの期間が長くなることにより裂莢するものが増える。

狭条密植栽培では無中耕・無培土が前提となるので、雑草防除は、播種直後の土壤処理型除草剤の1回散布で対応しなければならない。そのためには、発芽揃いを良好にし、初期生育を旺盛にすることによって、大豆茎葉の遮光による抑草効果を発揮させる必要がある。

牛尾 昭浩（農業技セ・作物部）

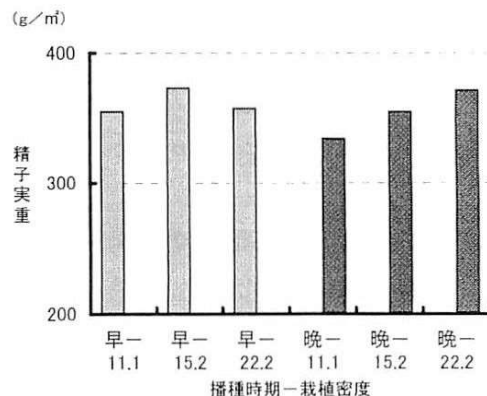


図1 播種時期及び栽植密度がサチユタカの収量に及ぼす影響
早:6月19日播種、晩:7月5日播種、栽植密度:11.1株/m²、15.2株/m²、22.2株/m²

表 播種期及び栽植密度の違いによる収穫期の各形質

播種期	株間(栽植密度) cm(本/m ²)	主茎長 cm	分枝数 本/株	茎径 mm(長径)	最下着莢位置 cm
6/19	30(11.1)	53	4.2	11.0	18.0
6/19	22(15.2)	58	3.1	9.6	19.5
6/19	15(22.2)	64	2.0	8.2	20.3
7/5	30(11.1)	47	4.7	9.5	14.9
7/5	22(15.2)	53	3.8	8.6	16.8
7/5	15(22.2)	56	2.6	7.9	19.8

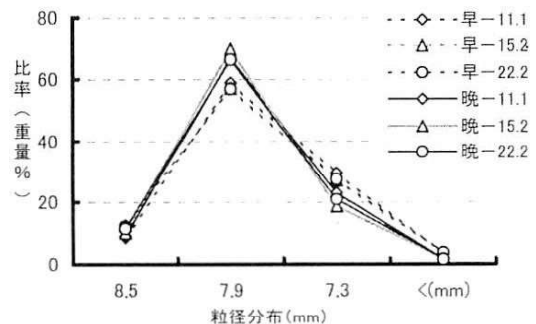


図2 播種時期及び栽植密度の違いがサチユタカの粒径分布に及ぼす影響
早:6月19日播種、晩:7月5日播種、栽植密度:11.1株/m²、15.2株/m²、22.2株/m²